

女性医師支援センター便り



第10回女性医師支援セミナー開催報告

宮城県女性医師支援センター委員

宮城県医師会常任理事

安藤 由紀子

平成28年10月22日土曜日午後4時30分より、宮城県医師会館5階会議室「北上」にて、第10回女性医師支援セミナーが開催された。

節目となる今回第10回目のセミナーのテーマは、「広がれ！イクボス・イクメンの輪」であった。総合司会は安藤が務めた。はじめに嘉数研二宮城県医師会長よりご挨拶をいただいた。宮城県女性医師支援センター長、宮城県医師会常任理事高橋克子先生の座長で特別講演に入った。

ファザーリング・ジャパン東北代表理事、工藤賢司氏から「働き方改革～イクボスの意味とイクメンの役割～」と題してお話しいただいた。工藤氏は、会社員として10年程は仕事に追われる生活をすごしていたが、震災後に起業し、その後仲間と共に父親の子育て支援に取り組む「ファザーリング・ジャパン東北」を設立した。現在は、NPO法人化し代表理事兼宮城代表に就いている。ここ数年は、部下の仕事と育児の両立を応援しようと「イクボス宣言」をする知事や企業経営者が全国で次々と現れ、今は工藤氏のもとにワーク・ライフ・バランスをテーマにした講演の依頼が増えているとのことである。会員は女性も含めて400人で、「よい父でなく、笑っている父」を増やすことをミッションとしている。働き方改革を進める上で重要な「イクボス」とは、職場で共に働く部下・スタッフのワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の両立）を考える、そしてその人のキャリアと人生を応援しながら、組織としての業績も出しつつ、自らも仕事と私生活を楽しむことができる上司（経営者・管理職）のことを指すとのことである（もちろん女性も含む）。イクメンを経験していればイクボスへの道は近くなる。イクメンはママへの気遣いをベースに実際の育児や家事に参加し、子育てへの共感を持つことができ、そして家族との一体感を得ることができる。このようにして皆が心身の健康や豊かな人脈形成などを通じて、ワークとライフの相乗効果（ワークライフシナジー）を得ることができるとのことのお話であった。

続いて、宮城県女性医師支援センター副センター長、宮城県医師会常任理事佐々木悦子先生がコーディネーターとなり、4人の先生方によるシンポジウムに入った。はじめに、仙台赤十字病院副院長・産科婦人科部長・総合周産期母子医療センター長、谷川原真吾先生から「当科での育児支援－産科医療を維持するための対策と今後の課題－」と題してお話しいただいた。医師不足の中、主治医制の廃止や産科施設の集約化とセミオープンシステム導入等で医師の負担軽減に取り組んできたが、その後、院内保育所の整備と時短勤務の導入で子育て中の女性医師を迎えることができた。現在は常勤医師の9名中5名が女性医師で、そのうち4名が子育て中である。全国では20～30代の産婦人科医師の3分の2が女性である。今後は、さらにフレキシブルな働き方を提供し、男性医師の働き方も含めてすべての産婦人科医が安心して産科の現場で働き続けることができる環境作りをすることが大切と結んだ。

2人目のシンポジストは、東北大学病院産科婦人科医局長、豊島将文先生で「医局員の多様性にいかに対応できるか」と題してお話しされた。女性医師の割合の高い診療科であり、妊娠・産育休・育児中の女性医師には当直免除等の勤務緩和を行っているが、それは勤務形態の多様性と考え支援をしている。復職支援や希望するキャリアパス等、医局員とコミュニケーションを十分に取り、環境整備とともに、他の医師にも負担が集中しない仕組みづくりをすすめているとのことであった。

次に国立病院機構仙台医療センター循環器内科、藤田央先生からは、「夫婦共働きにおける子育て～夫の立場より～」と題してお話しいただいた。先生は3人の子育て中で奥様も医師としてお仕事をされているが、これまでの子育てを振り返り、お話しされた。一人目のお子さんが生まれて奥様が専業主婦となり、その後自分の留学に伴い渡米し、2人目のお子さんが生まれた。そこで少し危機感を感じて夕食の準備などをするようになった。ベビーシッターや保育所が充実し、共働きや父親の育児参加があたりまえの米国で、奥様も仕事を始め順風満帆であった。帰国後奥様も臨床の仕事に復帰し、3人目が誕生し真の共働きにおける子育てが始まった。当初分担制にしたところ、分担だからと疲れていても無理をすることでうまくいかないことに気付いた。また、育児や家事をしているのだから偉いと勘違いしてしまっていた。大事なのは、謙虚にしかも積極的に育児や家事に取り組むこと、そして食事の準備などを楽しむこと、感謝の気持ちをお互いに口にすることである。また何よりも職場の理解が大切である。男性による育児は子供との関係が親密化するが、夫による育児はさらに妻との関係も親密化すること。最近になってようやく夫婦間で“バランスのとれた”協力のもと、育児を楽しめているとお話しされた。

最後に「女性（医師）にやさしい病院創り」と題して国立病院機構仙台医療センター副院長、宮城県医師会常任理事の橋本省先生からお話しいただいた。社会の様々な場面で男女共同参画が求められており、女性の進出は目覚ましく医療も例外ではない。若い世代の医師はほとんどが勤務医と考えられるので、病院においてはいかに女性医師が働く環境を整えるかが課題であり、今後の状況によっては死活問題となりうる。仙台医療センターはもともと女性の勤務環境はかなり整っているとの定評があったが、今回新築移転に際し、さらに女性にやさしい病院を創ることを念頭に設計を行った。保育園は十分な定員として120名、環境の良い場所に園庭付きである。病児・病後児保育にも対応する。またプライバシーに配慮し更衣室、シャワー室、当直室は管理階にレディースゾーンを設け女性専用とする。新病院は平成31年竣工予定とのことである。

以上4人のシンポジストの先生からお話しいただいて総合討論に入った。会場からはシンポジスト達のお話に感銘を受けたという意見が多く出され、エールが送られた。

宮城県医師会副会長櫻井芳明先生の閉会のご挨拶で会は終了した。

働き方改革はもうすでに組織のトップは取り組み始めている。組織トップの“イクボス宣言”により「私を含め、全員がイクボスになる」という意識が組織として重要で、生き残りにも関わってくるということを改めて実感した。またお互いに感謝の気持ちを口に出して伝えるということが職場でも家庭でも大切であり、協力して育児や家事をするイクメンは当たり前のことと一般的になりつつある。

その後の情報交換会では、宮城県女性医師支援センター委員の山本蒔子先生からご挨拶いただいた。年々良い会となっているが、これまでのセミナーで一番内容も充実してすばらしい会であったとのことであった。

「これからは私たちシニアの働き方も考えていかななくては」と話されていたのがとても印象に残った。